

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成24年 4月 9日

財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 人間・環境学研究科

職 名 教授

氏 名 藤 田 耕 司

助成の種類	平成23年度 ・ 国際会議開催助成		
事業内容	第9回言語進化の国際会議 (EVOLANG IX)		
開催期間	平成24年 3月13日 ~ 平成24年 3月16日		
開催場所	キャンパスプラザ京都 (京都市下京区西洞院通塩小路下る)		
参加者	総数 約350名	内訳 国内約150、国外約200	一般約270、学生約80
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(大会プログラム等、学会HPからダウンロード可能な資料の一部)		
会計報告	事業に要した経費総額	(飲食・宴会経費を除いた額)	12,573,38 円
	うち当財団からの助成額		1,500,000 円
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) JSPS科学研究費、JST-ERATO、参加者登録	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	会場費	611,200	611,200
	大会ハンドブック等印刷費	1,175,000	0
	講演者招聘費(旅費・謝金等)	7,832,600	0
	学生参加補助費	1,740,000	169,820
	参加登録ウェブサイト作成・管理費	718,980	718,980
	OA機器等レンタル費	169,000	0
当日受付人件費	45,000	0	
ポスター印刷・発送費	200,000	0	
その他雑費	81,600	0	
合 計	12,573,380	1,500,000	

平成 23 年度 国際会議開催助成

第 9 回言語進化の国際会議 (EVOLANG IX)

人間・環境学研究科 教授 藤田耕司

成果の概要

『言語進化の国際会議』(The International Conference on the Evolution of Language, 略称 EVOLANG) は、人間言語の起源と進化に関わる世界唯一の国際学会である。1996 年の英国エジンバラ大学での第 1 回大会以来、これまでは欧米各地で隔年で開催されてきたが、今回、アジア圏で初となる第 9 回大会 (EVOLANG IX) を京都の地で主催することができた。2012 年 3 月 13 日～16 日の 4 日間に渡って開催された今大会は、1 年前の東北・東日本大震災の影響で一時は開催すら危ぶまれたが、結果的にはのべ参加者数 1200 名超と、過去最大規模の大会となった。プログラムは全体講演 11 件、招待講演 5 件、一般発表約 110 件 (ポスター含む)、特別ワークショップ 5 部門計約 30 件 (招待講演含む) と、非常に充実したものであり、分野的にも言語学、生物学、人類学、霊長類学、脳神経学、動物行動生態学、コンピュータ・モデリングをはじめとする多領域からの多数の参加者を得て、この研究テーマにふさわしい真に学際的な学会となった。

全体講演者や招待講演者はいずれもそれぞれの分野を代表する世界トップクラスの研究者ばかりであり、参加者は普段の自分の専門領域では触れる機会が乏しい他領域の先端研究に接して学び、またあらゆる機会をとらえて交流し、相互啓発を行った。初日に開催されたワークショップは、(1)理論言語学・生物言語学、(2)言語と脳、(3)情動と言語、(4)動物コミュニケーションと言語進化、(5)言語進化への構成論的アプローチ、の 5 部門に分かれ、本会議とはまた雰囲気の違いがあった、より専門性の高い集中的な議論の場となっていていずれも盛会であ

った。このような他に類を見ない規模の学際的国際学会を貴財団の助成を受けて開催できたことにより、言語の起源・進化研究における日本の優位性を確立させ、その中で特に京都大学が果たす中心的な役割を明確にし、また多くの優秀な若手をこの分野に積極的に参入させ、さらなる国際的業績を生み出せる分野として成熟させるという、当初の開催目的は十分に果たせたと言える。

これまで欧米諸国に比べて我が国の言語進化研究はその活発さにおいてやや遅れをとっていた面もある一方、関係する研究者たちの分野を超えた相互理解の深さと協力体制の強固さにおいては、我が国の現状はむしろ世界に先駆けるものがある。それは今大会の運営面にもいかに発揮され、非常によく組織された学会であった、このような学会に参加できたことは光栄である、といった賞賛の声が、私（生物言語学）や東京大・岡ノ谷一夫（認知生物学）から構成される当組織委員会に多数寄せられた。これにより、我が国がこの分野において先導的な役割を担い得ることを、世界の研究者に広くアピールすることができたはずである。また同組織委員会は、できるだけ多くのことを自らの手で行い、経費を極力節約するという方針をとったため、過去の大会に比べて参加登録費を大幅に安価に抑え、かつ、海外からの参加者に京都の伝統文化に接してもらい催しなど、過去の大会にはない創意あふれる企画を多数実現することで、すべての参加者にとって充実した大会とすることができた。特に、経済的に苦しい立場にある学生を国内外から多数参加させるために設けた参加費補助制度は、当該学生のみならず一般参加者からも絶賛されたが、これにも貴財団の助成金が有効に活用されている。

すべての参加者には 580 ページに及ぶハードカバー講演要旨集をはじめ、ワークショップハンドブックやカンファレンスバッグなど多数の配布物が渡され、EVOLANG IX への参加を一層有意義なものとした。これらの配布物の作成も、当組織委員会の努力によって従来よりも格段に安価に行うことができた。また本学会に合わせて刊行の準備を進めていた我が国初の専門論文集も震災による

多大な影響を受けながらも予定どおり、本大会開催記念論集として出版することができたが、これは今後の我が国の言語進化研究の道標となる大きな成果である（藤田耕司・岡ノ谷一夫 編『進化言語学の構築—新しい人間科学を目指して』ひつじ書房 2012年3月刊）。また、前日の3月12日には、本学会とも密接に関係する『京都生物言語学会議』（於・京都大学稲盛ホール）を私の科研費プロジェクトで開催したが、これも約180名の参加者を得、革新的な先端研究分野を我が国に紹介し、定着させることができたことも併せて記しておきたい（参考ウェブサイト：<http://www.bioling.jp/events/>）。

本学会の成果をさらに多くの人々と共有し、言語進化研究の一層の普及と発展を目指して、本学会に基づく専門論文集の刊行を現在計画中である。特に、11件の全体講演は京都大学 OpenCourseWare によってビデオ収録されており、視聴者の便宜を図る編集を加えた後にネット上で公開する予定である。全世界の関心ある研究者や学生、さらに一般の人々にも大いに役立ててもらえるはずである。本学会ウェブサイト（<http://kyoto.evolang.org/>）は学会終了後も継続して運営し、貴重な学術資料を多数提供する場として研究者に活用してもらうこととしている。我々の手による本大会の成功が、次回、EVOLANG X ウィーン大会(2014年)への大きなステップともなることは疑いようもない。